

令和9(2027)年度「次世代博士人材育成コース」指導教員（農学部）

※ 2026年4月時点の候補教員となります。

#	学部・学科もしくはコース	役職	氏名	研究キーワード ※九州大学研究者情報に掲載されている専門分野	研究概要 ※500字程度で	研究室等URL
1	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	教授	日下部 宜宏	ライフサイエンス / ゲノム生物学	近年、地球の環境変動や物流のグローバル化が進むことにより新興感染症を含む多様な感染症パンデミックの危険性が増大し続けています。安全な国産ワクチンを迅速に供給できる技術基盤の確立は重要ですが、感染症ワクチンは企業にとって魅力的な研究開発対象ではありませんでした。ワクチンによるウイルス感染症対策は、最小の費用で最大の効果が期待される理想的な疾病対策であると言われています。現在、多様な形態のワクチンが開発されていますが、迅速性、生産コスト、副作用に由来する忌避行動、経皮、粘膜ワクチンへの応用などの理由から国産の組換えタンパク質ワクチンに対する期待も非常に大きなものがあります。一方で、人類が大量生産できる組換えタンパク質ワクチン抗原の種類は非常に少なく、さらなる基盤技術の開発が必要です。九州大学では長期に渡り、450以上の近交系カイコ系統を維持管理してきました。その中から、難生産性タンパク質高生産性系統を同定し、独自のウイルスベクターの開発や、多数のタンパク質設計・発現に関するデータの蓄積と組み合わせ、難生産性タンパク質大量生産技術を確立しました。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/igs/
2	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	教授	松元 賢	熱帯植物病理学 / 環境微生物学 農業用資材開発（微生物培養土研究）	土壌微生物学と植物病理学を基盤とし、目に見えない微生物の機能を解明して農業生産や環境保全に役立てることを主眼としています。具体的には、熱帯・亜熱帯地域の作物病害を対象とした迅速な診断技術の開発や、有用微生物を用いた生物的防除の研究に取り組んでいます。特に、私が発見した「トリコデルマ菌911株」は、従来の菌株よりも約100倍という極めて高い増殖力を持ち、土壌病害の抑止に大きな効果を発揮します。この菌を活用した防除法の確立は、化学農業に依存しない環境低負荷型の農業を実現する鍵となります。また、資源リサイクルと微生物を融合させた研究にも注力しています。シュレッダー古紙や浄水汚泥、さらには使用済み紙おむつなどの廃棄物を微生物の棲み家や栄養源として再利用し、高機能な土壌改良資材「土壌サプリメント」を開発しました。これは産学官連携によって実用化され、廃棄物削減と土壌の健全化を両立するモデルとなっています。現在は、ブドウ栽培における土壌微生物相の解析や、絶滅危惧種であるハマタマボウキの保全技術開発など、国内外で多角的な研究を展開し、持続可能な農業の実現を目指しています。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/tropic/
3	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	教授	安井 秀	イネ / 植物育種学・植物遺伝学	農学部における指導教員の教育研究内容については、(1)イネの耐虫性、(2)イネの耐塩性、(3)イネ属近縁ならびに遠縁野生種の各種有用形質に関する遺伝・育種学的研究に大別されます。 (1)「イネの耐虫性に関する遺伝・育種学的研究」では、稲作の重要害虫であるウンカ・ヨコバイ類に対するイネの抵抗性の遺伝機構を解明するもので、選抜した遺伝資源を用いてその遺伝機構を明らかにするとともに、昆虫に対する抵抗性遺伝子の持続的利用を目指して、新たな耐虫性系統の開発を推進しています。(2)「イネの耐塩性に関する遺伝・育種学的研究」では、バングラデッシュ在来イネコレクションを用いてその耐塩性に関する遺伝変異を探索し、イネの耐塩性の遺伝的基盤を明らかにしようとしています。新たに開発した砂濾過海水を用いた耐塩性の評価方法を駆使して、耐塩性の程度の異なる複数の遺伝資源を用いて、耐塩性に関与する複数の耐性遺伝子を見出しています。最後に、(3)「イネ属近縁ならびに遠縁野生種の各種形質に関する遺伝・育種学的研究」では、各種有用形質に関する遺伝子座の同定を行うとともに、そのマーカー選抜育種を推進しています。	https://qikushu.github.io/
4	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	准教授	藤田 龍介	ライフサイエンス / 細胞生物学 環境・農学 / 昆虫科学 ライフサイエンス / 実験病理学 ライフサイエンス / 分子生物学 ライフサイエンス / ウイルス学	感染症を引き起こす病原体の多くは、昆虫によって媒介されます。中でもウイルスは進化速度が速く、数多くの未知種が存在しています。我々は新たな感染症の出現に備え、蚊やマダニ、ハエなどの衛生害虫を対象として新規ウイルスの探索と解析を行っています。未知のウイルスと出会い、その分子メカニズムを解き明かす行程は非常に面白いものです。 また、感染症対策は人の健康や畜産業の保護・発展のためにも不可欠です。我々は病気を媒介する昆虫の生態を調査し、媒介昆虫を防除することで感染症から人や動物をまもるための研究開発も進めています。	http://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/lse/wordpress/
5	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	准教授	丸山 宗利	昆虫学、分類学、生物多様性	昆虫はあらゆる生物のなかでもっとも姿かたちが豊かで、知られている種数も最大の分類群です。私はそのなかでもアリと共生する昆虫を専門とし、それらの多様性解明と系統進化を研究してきました。学生指導としては甲虫の系統分類学を主に担当しています。また昨今、気候変動や開発などにより、世界的に昆虫が減少しています。それを背景として、多くの人々に昆虫に対する興味を持っていただけるよう、講演や展示、書籍を通じて昆虫のすばらしさを多くの人々に知らしめる活動（普及啓発）を行っています。また地球上でどのように昆虫が多様化したのか、そして現在どのような状況におかれているのかなど、昆虫の多様性に関する講義を行っています。	https://myrmecophiles.com/

#	学部・学科もしくはコース	役職	氏名	研究キーワード ※九州大学研究者情報に掲載されている専門分野	研究概要 ※500字程度で	研究室等URL
6	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	准教授	三田 敏治	研究テーマ：セイボウ上科ハチ類の多様性 研究キーワード：昆虫分類学, 天敵	寄生性ハチ類の自然史や、寄主を介した分散実体に関心があります。セイボウ上科は寄生バチと狩りバチにいたるまでの様々な段階がみられます。彼らを中心にハチ類の種多様性や繁殖戦略, 分散戦略などを調べています。寄生性ハチ類は小さいながらもユニークな姿をしているものが多く、そのくらしも不思議に満ちています。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/entomology/
7	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	助教	細石 真吾	環境・農学 / 昆虫科学 ライフサイエンス / 多様性生物学、分類学 環境・農学 / 昆虫科学	熱帯アジア地域のアリ類の分類や系統、生物地理、多様性について研究しています。アリ類は陸上生態系において高いバイオマスを持つ重要な構成要素ですが、熱帯地域では学名未詳な種が多いため正確に多様性を把握できない状態です。その分類学的問題を解決するために、国内外での野外調査でサンプルを収集し、形態観察と分子生物学実験から種多様性の解明を行っています。また、森林伐採やプランテーション化、火入れによる人為的攪乱や、洪水や温暖化による攪乱がアリ群集に与える影響について、DNAバーコーディングや多変量解析を用いて明らかにしています。近年では外来アリについての研究も行っています。外来種は在来生態系に悪影響を与えることがあるため、早期発見と防除が必要です。現地で得られた分布データと周辺の土地利用や緑地タイプの情報を合わせて解析することで、分布拡大の予測を行い、実社会に役立つ提言をしています。	https://sites.google.com/site/hosoishishingowebiste/
8	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	助教	水ノ江 雄輝	園芸作物 (果樹・野菜・花き)	園芸作物 (果樹・野菜・花き) は私たちの暮らしを豊かにするために欠かせない農作物です。これら園芸作物を対象として、より高品質なものを、いかに多く、簡単に作るかを目的として研究しています。研究テーマは園芸作物や研究目的に応じて幅広く設定でき、目的達成のためのアプローチも多岐にわたることから、自分だけの研究テーマを見つけることができます。研究では、栽培試験、化学分析、遺伝子分析などの手法を用いることで、園芸作物の生理生態、遺伝情報を明らかにし、得られた知見を活かして新品種の作出や栽培技術の改良を行っています。九州大学の園芸学研究室は全国的にも珍しく、ひとつの研究室で果樹・野菜・花きを扱っており、世界中に分布する園芸作物の普遍性と多様性を学ぶことができます。園芸学では、園芸作物の生産において質と量の向上に貢献し、生産者・消費者の皆さんを幸せにするという実用的な研究だけでなく、植物が外的環境に対してなぜそのような反応を示すのか明らかにする学術的な研究、その時代の人々がどのような植物を求め、残してきたかを探る歴史学的な研究を行えることも魅力です。	https://kyudai-hort.simdif.com/
9	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・農学分野	助教	屋宜 禎央	分類学/蛾類/リーフマイナー	100万種以上の圧倒的な多様性をもつ昆虫の中でも、とくに蛾類を対象に、分類学を通じた多様性の解明に関する研究を行っています。なかでも、体サイズが小さい小蛾類は、多様性の解明が不十分で、多くの未記載種、日本未記録種が残されています。また、小蛾類は蛾類の進化の初期に分化したため、蛾類の進化過程を理解する上で非常に重要であると言えます。さらに、蛾類は9割以上の種が植食性であることが知られており、植物と密接な関係を持っています。その中には多くの害虫が含まれ、在来種だけでなく、近年国外から侵入した種も知られています。これらを正確に同定することは、統合的病害虫管理を行う上で重要です。したがって、国内外でサンプリングを行って、得られた標本をもとに同定を進めるとともに、種を識別できる形態形質の探索やDNA情報の蓄積、簡易的な同定法の検討を行っています。また、様々な植物種を利用する蛾類は、種によって葉に潜る、葉をつづる、茎や枝、果実に潜るなど、様々な部位を多様な方法で利用することが知られています。こういった植物利用の実態や種間相互作用の解明にも取り組んでいます。	https://ag.kyushu-u.ac.jp/organization/teacher/lab/dx/index.html https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/entomology/member.html
10	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・生物生産環境工学分野	教授	岩田 幸良	灌漑/リモートシング/GIS/情報/土壌科学/土壌凍結	作物生産にとって必要不可欠な水をどのように与えれば作物が良く育つかを、土の構造や土の中の水や肥料の動き方を明らかにすることで解明していきます。また、バイオ炭や高吸水性ポリマー等を施用することで、雨が少ない環境でも植物が育つような環境を作る方法について考えます。さらに、植物の根と水や肥料との関係を調べることで、雨が少ない環境でも植物が良く育つような技術開発を行います。これらの研究を通して、砂漠化が進む海外や温暖化により雨が降りにくくなると考えられている将来の日本において、安定した食糧生産を実現するにはどうしたら良いかを考えます。	https://www-irri.bpes.kyushu-u.ac.jp/index.html

#	学部・学科もしくはコース	役職	氏名	研究キーワード ※九州大学研究者情報に掲載されている専門分野	研究概要 ※500字程度で	研究室等URL
11	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・生物生産環境工学分野	教授	原田 昌佳	水環境工学, 環境水理学, 水質工学, 数理解析, 水環境修復	我が国では、閉鎖性水域とも呼ばれる湖沼・貯水池は、古くからして現代でも、貴重な農業用水源として利用されていますが、農業排水・畜舎廃水・生活廃水による汚濁物質の流入負荷の影響を受けて、有機汚濁・富栄養化といった水環境問題を抱えています。特に、近年の気候変動に伴う温暖化や集中豪雨の頻発化の影響により、水環境の劣化がより深刻化しています。以上を背景に、農業農村工学の立場から、地域水資源の健全な維持・管理を通じた持続的な農業農村地域の発展に貢献できるような水環境学的な研究を進めています。特に、閉鎖性水域の有機汚濁・富栄養化問題の解決に資する水環境学的、水質工学的な教育研究として、1) 閉鎖性水域を対象とした水質汚濁問題（アオコの発生や無酸素状態の長期化）の発生メカニズムの定量化に向けた環境水理学的研究、2) 気候・地理的要因による水環境特性に基づく閉鎖性水域の水質改善技術のハイブリット化、3) 有機汚濁が進む閉鎖性水域の水環境保全に向けたLEDを利用した水環境修復技術の実用化と高度化、4) 閉鎖性有機汚濁水域の無酸素化解消に向けたウルトラファインバブル技術の高度化を展開しています。	https://www-water.bpes.kyushu-u.ac.jp/ https://www-water.bpes.kyushu-u.ac.jp/introduction_harada/
12	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・生物生産環境工学分野	准教授	田畑 俊範	環境水理学, 環境水文学	気候変動の進行に伴って激甚化・頻発化する洪水災害や、水環境の質的变化といった複雑な課題に対し、流域から沿岸域までを対象に持続可能な水環境管理の実現を目指している。 洪水予測に向けて、分布型水文モデルと深層学習（AI）を組み合わせたハイブリッド型の予測技術の開発に取り組んでいる。過去の降雨・水位データだけでなく、仮想的な極端降雨シナリオも活用することで、未経験規模の洪水に対しても適用可能な高精度予測の実現を目指している。 また、水理構造物に関する研究として、斜め堰を対象とした水理実験および数値解析を進めており、流れの三次元構造や乱流特性を詳細に把握することで、流況制御機能の評価や設計への応用を目指している。これにより、洪水時の水位低減や流れの安定化といった効果の定量的な理解を深めている。 さらに、柳川掘割や有明海、博多湾、加布里湾といった地域特有の水環境を対象に、栄養塩や有機物の動態解析を行い、富栄養化・貧栄養化といった相反する問題の解決に取り組んでいる。特に、柳川掘割では竹資源などの未利用資源の活用や、ICTを用いた水門操作の最適化などを組み合わせることで、陸域と海域をつなぐ物質循環の健全化を図っている。	https://www-water.bpes.kyushu-u.ac.jp/
13	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・生物生産システム工学分野	教授	岡安 崇史	ものづくり技術（機械・電気電子・化学工学） / 材料力学、機械材料 社会基盤（土木・建築・防災） / 土木材料、施工、建設マネジメント 社会基盤（土木・建築・防災） / 地盤工学 環境・農学 / 農業環境工学、農業情報工学	トラクタやコンバインなどの農業機械の設計開発において、計算力学は機械の走行や作業性能を向上させるために広く利用されてきました。近年では、農業ロボットや農産物輸送技術の進化に伴い、その応用範囲は「植物や農産物と機械・装置の間に生じる力学的な相互作用」の解析や可視化へと大きく広がっています。私たちの研究室では、収穫に至るまでの生産プロセス全体を視野に入れ、計算力学も取り入れた新しい農業生産技術の開発に挑んでいます。 一方で、これからの農業では、作業の自動化や支援ロボットの導入がさらに加速していくと予想されます。これらの技術を現場で真に役立てるためには、熟練農家の「目」に代わって植物の成長を高精度に捉えるセンシング技術が不可欠です。そこで当研究室では、情報通信技術（ICT）や最新の人工知能（AI）を駆使し、画像から植物の生育情報を正確に計測する手法の開発と、その社会実装に向けた研究を推進しています。	https://www-ampsd.bpes.kyushu-u.ac.jp/
14	農学部・生物資源環境科学科 生物資源生産科学コース・生物生産システム工学分野	准教授	光岡 宗司	農業情報工学/スマート農業	日本国内の基幹的農業従事者平均年齢も68.7歳と高止まり状態が続いており、今後20年間で基幹的農業従事者人口は約30万人へと激減し、深刻な労働力不足に直面すると予測されています。現在の生産水準を維持できる高い食料生産・供給体制を確立するためには、農業生産の更なる効率化が必須となっています。本研究では、ICTや人工知能（AI）を駆使して、農業生産の飛躍的な高度化を目指す「スマート農業」技術開発を目指します。農業ロボットや自動運転システムの更なる性能向上や新規営農者におけるスマート農機の有効活用のためには、作業時の土壌や作物の生育状況等の圃場環境に応じた作業精度および作業性能を満たす最適な制御システムについて模索します。	https://www-ampsd.bpes.kyushu-u.ac.jp/
15	農学部・生物資源環境科学科 地球森林科学コース・地球森林科学分野	教授	北岡 卓也	ナノテク・材料 / 高分子材料 ライフサイエンス / 生体医工学 ライフサイエンス / 木質科学 ナノテク・材料 / ナノ材料科学 ライフサイエンス / 生体材料学	私たちの身のまわりにある木は、ただの“硬い材料”ではありません。樹木の細胞壁をつくるセルロースなどの構造多糖は、自然が時間をかけて組み上げた超精密なナノ構造をもっています。一本一本は分子レベルでとても単純なのに、規則正しく並ぶことで、人工ではまず再現できない美しい構造と特別な性質が生まれます。私はその中でも、巨大な木を支える“極細の繊維”であるセルロースナノファイバー（CNF）に魅了され、そこに隠れた“未知の機能”を探る研究をしています。CNFは髪の毛の数千～数万分の1の細さで、軽くて強く、生体にやさしいという特徴があります。最近では、このナノ構造がヒトの細胞のふるまいを変えたり、免疫の反応を調節したりすることがわかってきました。つまり、木から取り出した天然のナノ材料が、医療や美容の分野で新しい役割を果たす可能性があるのです。 私の研究室では、CNFの表面にある“糖鎖の並び方”や“ナノレベルの形”が、細胞やタンパク質とどのように対話するのかを調べています。自然がつくったナノ構造をヒントに、創薬・再生医療・スキンケア材料など、未来のバイオマテリアルを生み出すことが目標です。木の中に隠れたナノの世界をのぞき込み、そこから新しい生命科学を切り拓く——そんな冒険のような研究です。	https://bm.wood.agr.kyushu-u.ac.jp/

#	学部・学科もしくはコース	役職	氏名	研究キーワード ※九州大学研究者情報に掲載されている専門分野	研究概要 ※500字程度で	研究室等URL
16	農学部・生物資源環境科学科 地球森林科学コース・地球森林科学分野	教授	後藤 栄治	野生植物、光応答、光合成、葉緑体運動	植物の生育環境は、温度、乾燥・大雨、光の強さなどが刻々と変わります。しかし、移動能力を欠く植物は、いったん芽生えた場所から逃げられません。強い光を受けたときに葉緑体の位置を変えたり、水が足りないときに気孔を閉じたりするのは、変動する環境に対応するための“ダイナミックな動き”です。こうした動きは、目に見える器官の変化だけでなく、細胞や細胞内の小さな世界で起こる精密な調節に支えられています。私たちは、植物が環境情報を受け取って体の状態（性質）を変えるプロセスを、遺伝子やタンパク質といった分子レベルまでさかのぼって解き明かし、「どのスイッチが、いつ、どのように働くのか」を明らかにします。さらに、得られた知見をもとに「どんな条件で、どんな反応が起きるか」を予測できる形へ整理し、環境変動に強い植物の創出へとつなげます。こうした成果は、栽培可能な耕作地の拡大による食料供給の向上や、植物のCO ₂ 固定の促進を通じた地球温暖化の緩和など、地球規模の課題解決に貢献します。植物の動的な環境応答を“分子の言葉”で理解し、そのしなやかな強さ（レジリエンス）を未来の社会に実装できるところに、この研究のおもしろさがあります。	https://gotohlab2019.wixsite.com/mysite
17	農学部・生物資源環境科学科 地球森林科学コース・地球森林科学分野	准教授	Andi Hermawan	木材加工、木材改質	木材は、軽くて強く、肌触りも温かい優れた天然素材です。しかし、水分を吸って形が変わったり、腐朽菌やシロアリに弱かったりといった課題もあります。本研究では、木材のミクロな「細胞」に注目します。細胞壁の隙間に特定の物質を浸透させたり、熱によって分子構造を組み替えたりする「木材改質（Wood Modification）」という手法を用い、木材本来の風合いを保ったまま、耐久性や寸法安定性を飛躍的に向上させます。単に「強い材料」を作るだけではありません。木材を長く使い続けられるようにすることは、炭素を長期間固定し、森林資源を守ることに直結します。最新の科学で「細胞レベルのリノベーション」を施し、持続可能な未来を支える新しい木材のカタチをデザインしています。	https://sites.google.com/view/womatech/
18	農学部・生物資源環境科学科 地球森林科学コース・地球森林科学分野	准教授	横田 慎吾	ナノテク・材料 / 複合材料、界面、薄膜、表面 界面物性 ライフサイエンス / 木質科学 環境・農学 / 環境農学	「生物に学び、活かし、超える！」をスローガンとして、環境調和型生物材料構築プロセスのデザインを目指しています。界面相互作用を操る独自のナノ・マイクロテクノロジーの探求、さらに得られる三次元構造と誘導される性質との相関を研究しています。特に、植物や微生物が産生するセルロースをはじめとしたバイオマテリアル（生物由来素材）のもつ優れた性質を粒子材料や薄膜材料の機能へと昇華させるための構造化・複合化プロセスの提案を目指しています。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/biomat/index.html
19	農学部・生物資源環境科学科 地球森林科学コース・地球森林科学分野	助教	高橋 大樹	ライフサイエンス / 進化生物学 ライフサイエンス / 生態学、環境学 ライフサイエンス / 多様性生物学、分類学	日本列島には約7,000種もの維管束植物が分布するとされており、世界的に見ても高い植物多様性を有しています。しかし、この多様性がどのように形成され、どのように維持されてきたのかについては、未だ十分に解明されていない点が多く残されています。私は、日本列島に分布する様々な植物を研究対象として、野外でのフィールドワークに基づく生態学的手法と、実験室でのDNA解析を中心とした分子生物学的手法を組み合わせることで、日本列島における植物多様性の形成過程の解明を目指しています。特に、花粉媒介者との相互作用に関連する花形質の進化、シカなどの植食動物に対する被食防御の進化、さらに動物による種子散布に関わる果実形質の進化など、生物間相互作用によって駆動される植物の適応進化に注目しています。さらに、近年の地球温暖化をはじめとする急速な環境変化の中で、希少植物をどのように保全していくべきかを探るため、植物の保全生物学的研究にも取り組んでいます。これらの研究を通して、日本列島の植物多様性の成り立ちを理解するとともに、生物多様性の保全に貢献し、持続可能な社会の実現に寄与することを目指しています。	https://gotohlab2019.wixsite.com/mysite
20	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・水産科学分野	教授	沖野 望	ライフサイエンス / 応用生物化学 ライフサイエンス / 機能生物化学 ライフサイエンス / 水圏生命科学	海洋には、様々な環境があり、そこに生息する生物の中には、ヒトの健康に貢献する有用な物質を生産する生物がたくさんいます。私たちは、海洋生物資源の有効利用という観点から研究を進めており、中でも特に、糖質や脂質の代謝酵素の探索とその利用に関する研究を海洋生物や微生物を対象に行っています。海洋生物が作る有用物質の一つにドコサヘキサエン酸（DHA）があります。私たちは、DHAを生産する海洋微生物ラビリンチュラ類を用いて、DHAなどの機能性脂質の生産とその利用に関する研究を進めています。また、カイメンから見つかった細菌型スフィンゴ糖脂質は、ヒトやマウスのナチュラルキラーT細胞を活性化することが知られています。私たちは、細菌型スフィンゴ糖脂質の合成酵素を活用して、細菌型スフィンゴ糖脂質の生物機能の解明や利用に関する研究を進めています。	http://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/kaishika/index.html

#	学部・学科もしくはコース	役職	氏名	研究キーワード ※九州大学研究者情報に掲載されている専門分野	研究概要 ※500字程度で	研究室等URL
21	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・水産科学分野	教授	荻野 由紀子	ライフサイエンス / 発生生物学 / 進化生物学 / 形態、構造	魚類では、体色や形態などの二次性徴形質が著しく多様化しており、これらは多様な繁殖戦略の進化に重要な役割を果たしています。メダカを中心とする魚類をモデルとして、男性ホルモン（アンドロゲン）によって形成される婚姻色や鱗の伸長などの装飾的な二次性徴形質に着目し、その発現を制御する遺伝的背景と分子機構の解明を進めています。さらに、内分泌攪乱化学物質がこれらの形質や生殖に与える影響についても研究しています。これらの成果は、生物の性の成り立ちや多様化についての理解を深めるだけでなく、化学物質による性の攪乱のメカニズム解明や、内分泌攪乱作用を示す化学物質のスクリーニングなどの応用研究にも貢献します。	https://ag.kyushu-u.ac.jp/organization/teacher/prof/y_ogino/
22	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・水産科学分野	教授	鬼倉 徳雄	淡水魚／環境DNA／生物分布モデル／クリーク／河川 (生物資源保全学・自然共生システム)	河川や農業水路で、主に淡水魚類をターゲットとして、生物多様性の保全、希少生物の保全に役立つデータを集めています。人と自然が共生できる社会、またネイチャーポジティブへの寄与を目指し、フィールドで得られた生物の分布・生息条件の解析などを行っています。最近では、採捕が難しい、生息数に乏しい希少魚について、野外で採水したサンプルを分析し、その魚のDNA量を測ることで、どれくらい生息しているのか、量的に評価する手法の開発にも取り組んでいます。近所の川や水路に、魚がたくさん生息する方が楽しいと思いませんか？あるいは、魚に関心がない人たちも、近所の水域にたくさん魚がいても別に困りませんよね。お魚たくさん、パラダイスを実現し、それを未来につなぐのが私の仕事！そのための研究を行っています。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/jikkensho/home.html
23	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・水産科学分野	教授	小北 智之	ライフサイエンス / 水圏生命科学 ライフサイエンス / 水圏生産科学 ライフサイエンス / 生態学、環境学 ライフサイエンス / 多様性生物学、分類学 ライフサイエンス / 進化生物学	愛玩動物が好きな人なら、その代表格である犬が示す多様性、たとえば犬種ごとの違いや、犬種内・犬種間にみられる体の大きさ、毛並み、性格の違いなどに関心をもったことがあるかもしれません。野生動物に目を向ければ、こうした多様性はさらに驚くべき広がりを見せます。現代の生命科学の発展により、このような生物多様性がどのような過程や仕組みによって生み出されてきたのかを、これまでになく深く探究できる時代になりました。今まさに、生物多様性科学の時代が到来しているといえます。 野生生物の世界は複雑で不思議に満ちていますが、その不思議の多くは進化の歴史の中で形づくられてきたものです。生物多様性科学のモデル脊椎動物ともいえる魚類や海洋生物を対象に、生態学・動物行動学の理論と観察を基盤としつつ、遺伝学やゲノム学などの分子レベルの先端的手法を駆使して、この豊かで奥深い世界を統合的に理解しようとしています。 こうした研究は、基礎科学として重要であるだけでなく、野生生物資源の持続的利用、生物多様性保全、さらには気候変動下での有用品種の開発など、SDGsに関わる課題やワンヘルスの実現に向けた重要な基盤になります。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/fisheries_biol/ https://x.com/Sui2KU
24	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・水産科学分野	准教授	TSE Ka Fai William	発生毒性学、環境科学	My research focuses on understanding how emerging environmental pollutants, particularly per- and polyfluoroalkyl substances (PFAS) and microplastics, affect aquatic organisms and potentially impact human health. These contaminants are increasingly detected in water systems worldwide and are known for their persistence and bioaccumulation in the environment. Using aquatic model, zebrafish, my work investigates how exposure to these pollutants influences development, physiology, and behavior. By combining experimental toxicology with molecular and cellular analyses, this research aims to identify the biological mechanisms underlying pollutant-induced toxicity. The ultimate goal is to better understand the ecological and health risks posed by environmental contaminants and to provide scientific evidence that can support environmental protection and public health policies.	https://ag.kyushu-u.ac.jp/english/organization/teacher/prof/tse_ka_fai_william/
25	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・水産科学分野	助教	高井 優生	環境・農学 / 環境影響評価 環境・農学 / 化学物質影響 ライフサイエンス / 動物生理化学、生理学、行動学	海や川、湖などの水環境において汚染物質（農薬や医薬品など化学物質やマイクロプラスチック）が水生生物に与える影響について研究を行っています。具体的には、生物が生存するうえで重要な行動（社会性や天敵応答反応など）への汚染物質の影響を簡易的に評価できる行動試験手法の開発や、生物に対する汚染物質の作用機序（有害性帰結経路：AOP）を解明し、影響評価に関する知見を集積することで水環境の保全に貢献することを目的としています。また、沿岸域を対象にした非侵襲的な環境モニタリング手法の開発としてフナムシの糞を活用した環境モニタリングも実施しています。	https://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/mes/index.html

#	学部・学科もしくはコース	役職	氏名	研究キーワード ※九州大学研究者情報に掲載されている専門分野	研究概要 ※500字程度で	研究室等URL
26	農学部・生物資源環境科学科 動物生産科学コース・アニマルサイエンス分野	准教授	森田 康広	気候変動/マイクロバイオーム/スマート畜産 /one health	本研究室では、暑熱環境下におけるウシの生理応答と生産性向上を中心課題とし、持続可能な酪農の実現を目指した研究を展開しています。生体センサーを用いた心拍や体温などの生体信号解析によるスマート畜産研究を推進するとともに、ルーメン・腸内・生殖器などのマイクロバイオームを「体内の生態系」として捉え、その変化が健康、行動、環境応答、疾病発症に及ぼす影響を統合的に解析しています。また、消化管細菌叢の解析を通じて、メタン排出や飼料利用効率に關与する微生物群を明らかにし、環境負荷低減型の飼養管理・飼料戦略の確立を目指しています。動物福祉、生産性、環境持続性を科学的に統合するOne Healthの理念のもと、持続可能な酪農システムの構築に取り組んでいます。	https://farm.kyushu-u.ac.jp/labo/ahl/